

はじめに

2007年度にがん対策基本法が施行され、2008年度にメタボリック症候群を対象にした特定健診・特定保健指導が発足するので、2005年度に婦人科健診施設(グリーンルーム)を、2006年度に人間ドックの施設をそれぞれ拡張した。この本会の対応と国民の高齢化に伴う健康志向の高まりとが相まって、2006年度は人間ドック受診者数が前年度よりもやや増加し、生活習慣病予防やがんの早期発見にこれまで以上に貢献できたのではないかと三輪総合健診部長は述べている。健康増進部は、人間ドック受診者を対象とした保健指導に力を注いだと報告し、検査一部は超音波検査がいろいろな検診に活用されている実態を報告している。参考になった。聖マリアンナ医科大学の須賀講師と吉田教授は、定期健診の成績をまとめられ、特定健診で測定される腹囲の意義を説明され、興味深かった。

胃がん検診は放射線部が、肺がん検診は高梨画像診断科長が、大腸がん検診は検査研究センターが業績をまとめ、国立がんセンター東病院の大松医長は、「東京から肺がんをなくす会」の検診について報告し、CTを導入した後では、肺がん発見率が2.5倍に増え、発見されたがんのサイズも小型になって、患者の5年生存率も明らかに伸びたと述べ、シングルヘリカルCTをマルチスライスCTに変えたところ、前者では、要精検者全員に再撮影が必要であったが、後者では再撮影がわずかに1.2%になり、受診者に大きく貢献したと報告している。

1973年に始められた地域住民、事業所等を対象とした来館方式の子宮頸がん検診の成績は伊藤婦人検診部長が、子宮がん細胞診の成績は長谷川検査研究センター長が、東京産婦人科医会会員から紹介された精検症例の成績は、慶應義塾大学の塚崎准教授がそれぞれ報告し、本会の子宮がん検診の歴史と現状が理解できる。本会は、2004年以降2台のマンモグラフィ搭載検診車を導入したため、乳がん検診受診者数、およびがん患者発見数が増加したと高梨画像診断科長は報告している。東京慈恵会医科大学の野木医師等は1981年以降の乳房2次検診センターの成績をまとめ、発見された疾患の種類や乳がん発見率、治療術式の変遷等を報告した。

新生児マス・スクリーニングの成績については、東京女子医科大学の杉原教授がクレチン症を、東京医科歯科大学の鹿島田医師が先天性副腎過形成症を、小児スクリーニング科が先天性代謝異常症を、それぞれ執筆した。しかし、発見された症例の中に予後が不明な症例があり、これに対応する必要があるという。妊婦甲状腺機能検査は、18,166人の妊婦を検査して、機能亢進症244例、低下症52例を発見し、その経過と治療を百瀬内分泌部長が報告した。性の健康医学財団の松田理事長は、過去15～20年間のクラミジアと淋菌の検査成績をまとめるとともに、性感染症の最近の動向の総説を寄稿され、予防の重要性を強調された。

学校保健では、東京女子医科大学の浅井教授が9万人余の心臓検診の成績を、日本医科大学の村上名誉教授が約31万人の腎臓検診の成績を、また、日本大学の浦上講師が約19万人の尿糖検査成績を、さらに、千葉東病院の大塚名誉院長が約5万人の脊柱側彎症検診の成績を報告し、女子栄養大学大学院の大和田教授は小児2型糖尿病が現在も増え続けていると述べ、興味深かった。また、東京女子医科大学の村田名誉教授は、学童の生活習慣病健診の成績を報告し、内臓脂肪型肥満に対応することが重要と指摘し、日本医科大学の前田教授は学童の貧血検査の現状を述べられた。

2006年度の生活環境検査成績は、検査担当科が報告し、本会の諸角学術委員は細菌・ウイルス性食中毒の総説を寄稿され、汚染防止が重要と述べられた。

以上、本年報は、各分野でご指導頂いている諸先生にご執筆頂いた。心から感謝し、各方面で本年報を大いに活用して頂くことを希望して、お礼の言葉にする次第である。

平成20年3月

財団法人 東京都予防医学協会
理事長 北川 照 男